

秋

菅田 忠志

日本には素晴らしい四季がある。中でも秋は昔から、いろいろなところで表現されてきた。中秋の名月、実りの秋、読書の秋から食欲の秋。他の季節に比べればおそらく秋が最も多く引用されているのではないだろうか。

そういえば、小倉百人一首最初に出てくる

「秋の田の かりほの庵いほの苫とまをあらみ

我わがころも手は露つゆにぬれつつ」

- 1 -

という天智天皇の句も、刈り入れ前の秋の田を守る番小屋で、ひとり過あすわびしさを歌った秋の句である。

なんとなく秋の句が多いような印象をもっていたので、1枚1枚読み返してみたところ、春の句5枚、夏3枚、秋20枚、冬5枚となった。

やはり秋の句がとびぬけている。百人一首は恋心

を歌ったものが多いため、感傷的な秋が似合うということがかもしれない。

感傷的といえば、秋の虫たちの存在も大きい。残暑がなかなかとれないころから、少しづつ虫たちの「調律」が始まる。はじめは少々きこちなかった音合わせも、中秋の名月を過ぎるころには、すっかり調律も終えていた。

コオロギたちの弦楽器と、カネタタキの規則正しく打つ打楽器に加えて、鈴虫たちの管楽器が、夜のオーケストラを華やかな音色に演出し盛り上げている。

耳をすませて聞いていると、ときどき、我々の知らないコンサートマスター役の虫がいるのではないかと、思うほどハモっているから不思議だ。

今夜もコンサートの始まりを楽しみに待っている。

- 2 -

そんなメルヘンチックな想像をしながら、夕刊を
読んでいたところ、「中国伝統のコオロギ相撲
《闘蟻》」についての記事が載っていた。

雄のコオロギを、弁当箱くらいの土俵の中で闘わ
せる、中国古来の奥深い遊びとしての紹介記事であ
った。闘わせる直前に、細い筆の先で刺激してやる
と、ほかの虫の触覚と勘違いしたコオロギは、縄張
りを荒らされたと怒り闘いだす。

一方が羽を鳴らして勝どきを上げ、もう一方がす
ごすごと引き下がったところで勝負あり。

しかし、そこには日本人の持つ「自然をいとおし
む心」のようなものはなく、《闘蟻》を、手に汗しな
がら見つめる子供や男たちの顔が頭をよぎり、せつ
かくのメルヘンコンサートを待つムードに水をささ
れてしまった。

ちよつといやな記事を読んできましたことを悔い
ながらも、部屋の名かりを消し、今夜もすてきな演
奏の始まるのを待ってしよう。